

【発表要旨】

「記すことの政治性——植民地期朝鮮における音楽記録の制度化と受容」

金志善（東京大学）

本発表では、植民地期朝鮮において音楽がどのように記録され、その記録行為が文化的・制度的にどのような意味を持ったのかを、音楽教育、記譜法、伝統音楽の採譜といった複数の層を通して検討する。

日本による統治下で導入された五線譜を基盤とする音楽教育は、唱歌や視唱を通じて「正しい音楽」の体系を制度的に普及・定着させることを目指した文化政策の一環であった。この過程で、朝鮮伝統音楽に内在する即興性や口承性、身体性は、近代的な記譜法に収まらない「記されないもの」として周縁化され、音楽観の再編が進んだ。一方、同時期に展開された伝統音楽の記録・採譜は、単なる保存活動にとどまらず、民族的な文化の意味づけや再定義に関わる営みでもあった。朝鮮総督府や日本人音楽学者による記録行為は、伝統音楽を文化資源として管理・分類する手段として用いられたが、その一方で、朝鮮人知識人の側からも自発的な記録・記述の実践が行われていた。こうした実践の併存は、「記すこと」が一方的な支配の手段であると同時に、文化的主体性を再主張する抵抗の手段でもあったことを示している。

本発表では、こうした記録行為の二重性に注目し、「記されるもの／記されないもの」の区分がいかにして制度的・政治的に構築され、音楽の価値づけや表象の枠組みと結びついていたのかを検討する。また、音楽をどのように記録し、どのように伝えるかをめぐっては、統一的な手法だけでなく、地域的・主体的な多様性が存在していた。本発表では、そのような記録方法の揺らぎに着目し、音楽の記録が植民地社会における文化的意味づけの一端を担っていた可能性について考察する。